

直島への手紙 第二信

前略 大岸 様

9月になり、朝晩が少し秋めいてきましたが、昼間は相も変わらず暑い日が続いていますが、お元気でしょうか？

直島諸島は大小様々な島が直島を取り巻くように見えます。島々の中心は、直島が一番大きな島ですので、中心であたり前のように思えるのですが、昔から直島が中心だったのかが気になって、少し、島の遺跡について調べてみました。少し、わかつてきたことがあるので、お手紙を出しました。

天保9年の「讃岐国直島女木嶋男木嶋」（瀬戸内海歴史民俗資料館蔵）を見ると、周辺の島の名前には「直島内」と記されていますので、直島を中心とした島のまとまりとして認識されていたことがわかります。

また、江戸時代に描かれた絵図をみてみると、直島には本村、積村、宮ノ浦、風戸村とかかれた場所に住まいが描かれていて、直島に4つの村ができ、周辺の島とは異なり、多くの人が住み、島々の中心地であったことがわかりますし、現在につながる状況が確認できます。いずれの場所も、湾に面し、船が停泊できる場所でかつ、安全、安心に住むことができる場所だったようです。

このほかにも、近年まで家島、喜兵衛島などにも人が住んでいましたし、島の方のお話からも周辺の島では農地などもあったようで、実際に、直島から、もしくは直島へと伝馬船で行き来する暮らしがあったようです。

では、直島群島のまわりにある島々はいつから群島とよばれる「まとまり」として認識され、直島が中心となったのかという疑問がでてきました。もちろん、直島が一番大きな島で、人が暮らすための場所がたくさん確保できるということが要因だとは思うのですが、やはりきっかけがあったのではないかと考えました。

このことを考える際にヒントとなったのが、島に残る遺跡です。遺跡から出土した土器を見てみると、各島で、様々な

時代のものが出土しています。古くは旧石器時代のものがありますが、現在のような島になった縄文時代以降、各島での活動があったことがわかります。

その中で、直島の北西にある風戸山西遺跡のように、複数の時代の土器が出土する遺跡がいくつある島にあります。直島周辺の遺跡と言えば、喜兵衛島の製塩遺跡が有名で、各島で製塩土器が見つかっています。ただ、製塩土器が出土した場所でも、日常で使用する土器が出土していますし、様々な時代の土器が出土しているということは、滞在した期間は様々でも、住む場所や生業を行う場所として、何度も繰り返し、各島が利用されたということだと思います。これは島の大きさに関わらないので、直島が中心というわけではなかったのではないかと思います。

その後、具体的には平安時代末頃、崇徳上皇が国府へと移る前に寄ったとされる頃に、積浦遺跡から様々な地域の焼き物や中国からの輸入陶磁器が出土しているんですよ。しかも港湾施設の一部と考えられる痕跡も見つかっています。その後、高原城や城跡から出土している土器などから16世紀頃には、現在の本村へと中心が移っていったようです。このように、中世以降には、直島の東側の積浦や高田浦が直島の中心地として、栄えていたのではないかでしょうか。

このように、各時代の遺跡の分布や性格からみてみると、積浦が港として栄えはじめたことがきっかけに、直島が島々の中心になったように考えられるのではないかと思っていますが、大岸さんはどう思いますか。

島の遺跡のことを調べていると、瀬戸内海が陸地で、岡山県と陸続きでつながっていた旧石器時代の頃の直島のことが気になってきました。ちょっと調べてみます。

大岸さん、また、お手紙書かせていただきます。

早々

展示担当 渡邊 誠 拝



直島と向島。その奥に家島。



崇徳天皇社からみた積浦港